

呉錦堂を語る会通

NO.23 Oct. 2015

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘 雄三 方「呉錦堂を語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「呉錦堂を語る会通信」編集委員

発行日 2015.10.15



呉錦堂の商号、「義生栄(ぎせいえい)」と「怡生(いせい)」

「通信」21号では呉錦堂の土地所有、特に、その出発点となった「栄町通1丁目17番」の土地について、続いて22号では、籠池通5丁目、及び6丁目の土地とそこに建築した家屋についてみてきました。当23号では、呉錦堂の商号、事業所所在地などについて調べた結果を報告いたします。(編集委員 橘 雄三)

《1. 商号「怡生号」の登記》

2006年、財団法人孫中山記念会発行『呉錦堂』「呉錦堂略年譜」を見ると、1890年(35歳)神戸に移住、貿易・海運会社「怡生号」(資本金30万円)創立、となっています。「怡生号」は、神戸地方務局の「商号登記簿」に存在しました。

まず、コンピュータ処理した「履歴事項全部証明書」の交付を受け、これに基づき、手書き原簿「旧商号登記簿」の調査を依頼し、存在確認後、コピー(この段、下の画像)の交付を受けました。この原簿の記録を書き起こしたのが枠内のデータです。

まず、最初の登記。

商号：怡生号

営業の種類：米穀・綿花・雑貨輸入、綿糸・燐寸輸出

営業所：兵庫県神戸市海岸通参丁目参拾四番屋敷
商号使用者ノ氏名・住所：兵庫県神戸市海岸通参丁目参拾四番屋敷 清国人呉錦堂

登記ノ年月日：明治参拾貳年拾貳月五日

続いて記載事項変更の記録。

明治参拾五年拾貳月壹日ヨリ左ノ通変更ス

営業の種類：米穀・綿花・大豆粕・雑貨輸入、綿糸・燐寸・雑貨輸出

営業所：兵庫県神戸市栄町通老丁目六拾八番屋敷

商号使用者ノ住所：兵庫県神戸市栄町通老丁目六拾八番屋敷

登記ノ年月日：明治参拾五年拾貳月拾七日

ここで、登記の時期が気になります。「呉錦堂略年譜」では、創立は1890年です。ところが、登記簿では1899年です。ペンディングとしておきます。

怡生号の位置ですが、登記時の「海岸通参丁目参拾四番屋敷」も記載事項変更後の「栄町通老丁目六拾八番屋敷」も、住所であっても地番ではないので、おおよその位置はわかりますが、特定は難しいです。登記時の営業所及び住所は神戸華僑歴史博物館からそう遠くないところで、記載事項変更後の営業所及び住所は、「通信」21号に記述したとおり、南京町の南門を出て、栄町通を渡り、三井住友海上のビルの南、あるいは東あたりと考えられます。

補注 現在、これら法務局データはコンピュータ化されていますが、コンピュータ化に際し、既に「閉鎖」されている商号については、コンピュータへ「移記」されなかったとのこと。たまたま、「怡生号」は閉鎖されず、生きていたから「移記」され、コンピュータの検索にヒットし、原簿にたどり着くことができました。幸いでした。

一	二	三	四
商号	種類	営業所	商号使用者ノ氏名・住所
怡生号	米穀・綿花・雑貨輸入・綿糸・燐寸輸出	兵庫県神戸市海岸通参丁目参拾四番屋敷	清国人 呉錦堂
		兵庫県神戸市栄町通老丁目六拾八番屋敷	

001605

明治参拾五年拾貳月拾七日ヨリ左ノ通変更ス

入綿糸・燐寸・雑貨輸出

三 怡生号所 兵衛 岸屋敷神戸市

四 商号使用者ノ氏名・住所 兵衛 岸屋敷神戸市

明治参拾五年拾貳月拾七日 登記

呉錦堂の商号、「義生栄」と「怡生」（続き）

《2. もう一つの商号、「義生栄」》

関帝廟の庭に、「創修中華会館記」と「謹將神戸各捐金芳名開列」、二つの石碑が並んでいます。神阪中華会館は、碑文によると、第七代駐神戸兼大阪正理事（領事）洪澂昌の呼びかけで建設が決まり、華僑857人並びに商店から二万六千余円の寄付が集まり、工期一年余を経て、1893年1月に竣工しております。（この段落は中華会館編 2000年発行『落地生根』による）

この碑文の寄付300円の並びに「義生栄」があり、100円の並びに、「怡生」があります。

まず、「義生栄」です。上掲『落地生根』102頁、「中華会館創建時寄付者一覧」に300円 義生栄<呉錦堂>とあります。ところで、碑文には、「義生栄」とだけあって、事業主名はありません。「義生栄」を呉錦堂とする根拠は何なのでしょう。法務局で、「義生栄」及び「義生」で「履歴事項全部証明書」の交付を申請したところ、いずれも、コンピューターの検索にヒットせず、「これ以上の調査はできません」と、職員の冷たい言葉が返ってきました。法務局以外では、税関や商店・会社自身に輸出入等の記録が残っているかとも考えられますが、私の力の及ばない領域です。

次は、碑文、寄付100円の「怡生」です。前頁で取り上げましたように、商号登記は、中華会館の寄付の6、7年後のことです。しかし、碑文「怡生」のこの時期の事業主は、まず、呉錦堂で間違いないと考えます。

多少の疑念は残りますが、呉錦堂は、二つの商号で計400円の寄付をしたこととなります。写真の通り、大きな石碑ですが、300円の拠出者は最上段です。呉錦堂は神戸へ出てきて間のないこの時期、30代の年齢で既に大きな財力を持っていたことがわかります。



右の写真の右の碑が「創修中華会館記」、左が「謹將神戸各捐金芳名開列」です



《3. 『図解神戸清商外商営業須知』》

「義生栄」や「怡生」のことを調べているとき、神戸華僑歴史博物館の安井三吉先生から、同館蔵書『図解神戸清商外商営業須知』（神戸日華新報社 明治43年）を紹介されました。同著からわかったことを3点、報告いたします。

まず一点。下に掲載したのは、同著添付「清商外商明細地図」の一部拡大図です。ここは、旧居留地です。



朱○は清国商人以外の外国商人の商店・会社です。西北の隅に、わずか二つ、緑○があります。これは清国商人です。（○は編集委員が付加しました）

二点目。「怡生号」については、1910年のこの時期、「主人 呉錦堂 資産家」とだけあって、他の商店には記載のある、営業内容も取引先も記載されておられません。つまり、休業中とみうけられます。ただ一つ、興味深い記述を見つけました。それは、所在地で、「中山手通3丁目」とあります。番地がないのは残念ですが、以前から探している、呉錦堂が大阪から神戸に出てきて最初の住所、「中山手」につながるヒントになるような気がします。

三点目。「義生栄」は、所在地が「東源号内」となっていて、営業主名がなく、「代理 徐蕙生」となっています。その他、「営業 輸出一燐寸製造」「取引先 上海方面」の記載があります。1910年のこの時期、「義生栄」に呉錦堂の名前は出てきておられません。

編集後記

『大人物小故事 我的外公呉錦堂』を延べ20回にわたって掲載してきましたが、次頁の(20)で完結します。長期にわたってのご愛読、ありがとうございました。（編集委員 橘雄三）

大人物小故事 (20)

我的外公吳錦堂

曹愛德著

后 記

为弘扬外公精神，我鼓起勇气挥动拙笔，用心回忆母亲过去讲给我听的有关外公的许多小故事并反复阅读介绍外公事迹的书刊，文章，试编了《大人物，小故事》这本小册子，以示缅怀和传承外公的好思想，好品德。

在回忆一个个小故事的过程中，让我又享受了一次学习，接受教育的过程，外公的高尚品质，使我得益非浅，我一辈子感恩外公。

《大人物，小故事》编写现已告一段落，在这期间，我得到了浙江慈溪市周乃复先生对我的帮助（为介绍外公伟大的一生，他撰写了厚厚的系列丛书），为我提供了许多宝贵的素材，丰富了“小故事”的内容，并与宁波日报记者费志军专程来苏亲临指导，在此我表示衷心的感谢。同时也要感谢宁波市中国银行为弘扬外公精神出资赞助拍摄纪录片“难忘锦堂”，之后多次在中央四台播放，让我亲眼目睹外公的光辉形象和进一步了解外公对中国和日本的贡献。在外公诞辰140周年暨锦堂学校校庆一百周年之际，慈溪市人民政府和学校分别来函来电邀请我参加纪念大会，入座主席台代表亲属发言，由此我萌发出写“小故事”的动机，而且有幸认识日本三江会馆馆长姜成生先生，为我去日本进一步了解外公创造了条件，在此我一并表示深深的感谢。最后我也要感谢我的老母亲，为“小故事”提供了她精心保存几十年的老照片。我更要特别感恩天父，给我加倍的力量，智慧，毅力，使我冲破重重阻力，成全了我想做的事，我愿恒久依靠，赞美主。《大人物，小故事》毕竟是我的处女作，难免会出现错误，敬请专家和读者多提宝贵意见！谢谢！

外孙女 曹爱德

苏州市平江实验学校高级音乐教师（退休）

二零一零年八月



【外公一九零五年创办的锦堂学校】

後 記

祖父の精神を大いに発揚するため、私は勇気を奮い起こして拙い筆をとり、母が私に話して聞かせた祖父についての多くの小さな話を注意深く思い起こし、また、祖父の事績を紹介した書籍、文章を繰り返し読んで、この小冊子、『大人物、小故事』を書いてみました。以って、祖父の立派な考え方、すばらしい品德を追想し、伝承するものです。

全ての小さな話を思い起こす過程で、私は学び、啓発され、祖父の高尚な人格は、私に多くの影響を与え、私は一生、祖父に恩を感じる事となりました。

『大人物、小故事』の執筆は、現在すでに一段落しましたが、この間、私は浙江省慈溪市の周乃復先生の助けを受けました（氏は、祖父の偉大な一生を紹介する厚い双書を著しておられます）。氏が私に提供してくださった多くの貴重な素材が、『小故事』の内容を豊かにしてくれました。そしてまた、周先生は寧波日報の記者、費志軍氏と一緒に、わざわざ、蘇州まで来て指導してくださいました。心から感謝申し上げます。同時に、また、寧波市中国銀行に感謝いたします。同行は、祖父の精神を発揚するため、『錦堂忘じ難し』の撮影にご出資、ご助成くださいました。その後、この番組は何度も中央の4チャンネルで放映され、私は、祖父の輝かしい人間像を目のあたりにし、更に、祖父の中国と日本に対する貢献を知ることができました。祖父の生誕140周年ならびに、錦堂学校創立百周年に際して、慈溪市人民政府と学校から、別々に、記念大会への招待状と電報をいただきました。式典では、高い席につき、親族を代表してあいさつしました。この式典出席から、『小故事』を書こうという気持ちが芽生えました。また、幸いなことに、日本の三江会馆館長の姜成生先生と知り合いになりました。先生は、私が日本へ行って、更に深く、祖父のことを理解するための状況を創りだしてくださいました。ここに併せて深く感謝の意を表します。最後に、私は、老いた母にも感謝しなければなりません。母は、何十年も大切に保存していた古い写真を『小故事』のために提供してくれました。私は更に、主（しゅ 神）に、特別に恩を感じなければなりません。主は、私に人一倍の力と知恵と気力をくださり、厳しい障害を突破し、私のやりたいことが達成できるように助けてくださいました。私は、変わらぬ主の愛を信じ、主を讃えます。『大人物、小故事』は所詮、私の处女作です。間違いは避けがたい。謹んで、専門家ならびに読者の貴重なご指摘、ご意見をお願いいたします。

外孫 曹愛德

蘇州市平江实验学校高级音乐教师（定年退職）

二〇一〇年八月

「横山栄吉考」－移情閣の設計者は横山栄吉！？－

いままで、移情閣（孫文記念館）を拠点として活動してきた私たちは、移情閣の設計者といえば、「イギリス人建築家ハンセルの弟子、横山栄吉」と信じて疑いませんでした。ところが、先日の足立裕司先生のご講演以来、この横山栄吉説が揺らいでおります。

横山栄吉その人を考えるにあたって、中華会館が関係してきます。丁度、当23号で中華会館に言及しましたので、いまが好機と、ここでこのテーマを取り上げました。
(編集委員 橘雄三)

《1. 移情閣の設計者、「横山栄吉説」の出处》

『兵庫県立舞子公園百年史』（財団法人兵庫県園芸・公園協会 2001年）の36-7頁、移情閣の建築に関する文章中、「設計者は明治の異人館建築で有名なイギリス人建築家ハンセルの弟子、横山栄吉で、彼の会心の作といわれる。（中略）建築の内部も当

画像は孫文記念館所蔵



然当時の洋館のデザインでまとめられているが、要所に中国趣味が取り入れられ、東西文化の織りなす作品になっている。これは少なからず施主の呉錦堂の注文によるものと考えられ、設計者と施主の間のせめぎ合いが伺われる」と記述されています。同著に執筆者名はありませんが、設計者は横山栄吉で一点の疑念もないという表現になっています。

《2. 「横山栄吉説」、揺らぐ》

今年の5月、孫文記念館で開催された移情閣上棟百周年記念講演「孫文記念館の歴史－建物が語ることそして現在からの問いかけ－」の中で、講師の足立裕司先生は、「移情閣の設計者ですが、坂本勝比古先生は横山栄吉といわれているのですが、私が追認の調査をしても、この人の名前は出てこないのです」「最後に残った疑問点は横山栄吉とは誰かということですが、残念ですが詳しいことは分かりません。これからもっと調査をしないといけない人だと私自身は思っております」とおっしゃっています。

《3. 1917年、中華会館を大修理した横山栄吉》

鴻山俊雄著『神戸大阪の華僑－在日華僑百年史－』（華僑問題研究所 1979年）に次の記述があります。「大正6年5月、光緒19年すなわち、明治26年に創建された中華会館は、26年振りに大修理が施される

こととなった。これまで時々部分的な補修をして来たが、瓦の破損、たるき、壁の塗替えをしなかったため、雨漏れによる腐蝕、壁の汚損がひどくなったからである。中華会館では、予算6千円を計上して修理することとした。経費の内訳は、家屋の修理三千六百元、ペンキ及び金箔塗装費二千四百円として、日本人棟梁横山栄吉に請負わせることとなった。しかし所要経費は巨額であり、会館ではまかなえないので、各幫に募金を依頼することになり、理事長呉錦堂は率先して千円を寄付している。」

《4. 呉錦堂と横山栄吉をつなぐ糸》

上掲『落地生根』に、中華会館の創建に関し次の記述があります。「(領事) 洪遐昌は(中略)、横浜にならって純中国式廟建築の神阪中華会館をこの地に建築することを神戸と大阪の華僑に呼びかけた。」

「中華会館は当時横浜に在住していた鄭礼という広東人棟梁の指揮の下で中国大陸から多くの大工や専門職人が動員されて建築が進められ、…」

つまり、呉錦堂らは純中国式建築の修理を日本人棟梁に任せただけのことになります。移情閣上棟の1915年5月から丁度2年のこの時期に、呉錦堂と横山栄吉の名が並んで出てくるのは偶然とはとても考えられません。以前からの付き合いを想像させるに十分です。と、これだけでは、移情閣の設計者を誰とするほどの決め手にはなりません。

どなたか、横山栄吉について情報をお持ちの方、提供をお願いいたします。



1913年3月13日、中華会館での孫文歓迎会
(『孫文先生東游紀念写真帖』より)